パネル発表「学年動物飼育が動物に関する知識および心理的成長に与える影響」

－小学４年時から６年時までの縦断研究－

中川美穂子※　中島由佳※※　無藤隆※※※

１　はじめに

我々は学校における動物飼育活動が児童に与える影響について、その飼育状況や児童への有用性に関して報告[1, 2]してきた。05年から４年生が全員で飼育を担当する小学校でその影響について、３年間の縦断調査をしてきたが、その中間報告として、07年に「４年生で一年間動物飼育体験をした子達は人への優しさが増した」と報告[3]している。またこのデータを、飼育活動の内容、つまり学校の方針による飼育状況や教師と獣医師の関わりなどの条件を検討しながら、飼育活動直前(T1)、飼育終了時(T2)、そして飼育終了後一年経過時(T3)の３時点での影響を検討したところ、その条件により個人の変化量に差が見られた。

２　条件による３群分け：

①群：教育課程に沿って年間計画を立てて飼育活動をしている学校の４年生

②群：飼育活動の教育的目的を持たず、獣医師の活用がなく「掃除と餌やり」に終始している学校の4年生

③対照群：飼育活動のない４年生（５，６年生による飼育委員会方式の学校のため４年は飼育しない）

なお、調査は12小学校、約1000人を対象にアンケート方式で３回行われたが、全時点に回答した子のみのデータを比較した。これら12校がある２市では、獣医師会との飼育支援体制が取られているが、１群では、獣医師を活用するカリキュラムがくまれていた。

３　結果

３群を比較検討したところ、学校のカリキュラムに取り入れて飼育してきた４年児童が、他群と比べて、「向社会的態度・人への思いやり」が身につき(図１)、かつ「学校適応」にも有意の差をもって効果が認められた。またこれは飼育終了後1年経過時点でも、維持されていた。

４考察

以上のことから、学校動物の継続飼育活動の教育的効果は、カリキュラムになっている。つまり、明確な学校の教育方針と教師の積極的な指導のもと、獣医師の支援を得ながら「大人が命を大事にする態度」を児童に示すことが重要な因子となることが明らかになった。

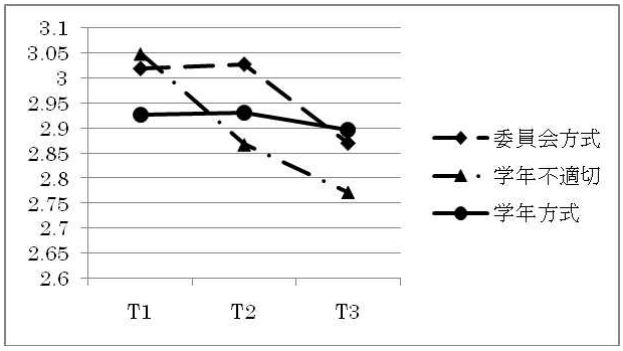

図１

今回、以上の結果と児童の発達段階を踏まえ、生き物への感性を養う幼時期から、人と似た感情を見せるほ乳類や鳥類を世話して、その体への知識と気遣いを培う小学校中学年までの時期、人と動物の関係を考える小学校高学年から中学生、生活への活用を考える高校時期など、生物教育と人格形成教育の一環としての動物飼育活動のねらいと方法を資料に提示した。また、各年代の年間教育計画もあわせて提示したが、特に、初等教育では、最初に動物を与える時は、専門家の支援を受けて行うと、前述のように教育的効果が高くなることを、実践から報告した。

注釈１）鳩貝太郎他：生命尊重の教育に関する調査結果と考察，科研費報告書・生命尊重の態度育成に関わる生物教材の構成と評価に関する調査研究，5-22（2004）２）中川美穂子：小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて，子ども発達教育研究センター紀要，4，53-65（2007）３）中島由佳、中川美穂子，無藤隆等：学年での動物飼育体験が子どもに与える動物への共感性および向社会的行動の発達に与える影響の検討，全国学校飼育動物研究会誌「動物飼育と教育」，6，43-46(2007)

（※西東京市学校獣医師　※※日本学術会議　※※※白梅学園大学大学院）